

という人が多い。

女生徒のために一時期男子生徒に做った黒ないし紺サージの制服と襟章が作られたこともあったが、生徒が反対したため普及しなかった。恐らく粗悪品だったのだろう、満員電車から降りたらボタンが一つもなかったという話もある。物資不足の折り、毛布で作った上着やズボン、焼け残りのカーテンで作ったブラウス、敷物マットで作った靴等々、みな有り合わせのものを着て登校した。

男女共学になったとは言え、昭和二十年代の学生生活は困難の多いものだった。そうした困難を乗り越えさせたものは、若さと向学心、新しい時代への期待であったと言えよう。第一回女生徒三十七名のなかには病死した者、病氣や結婚その他により退学した者も多く、順当に卒業したのは二十七名であったが、努力家が多かった。油画科の卒業制作の採点の結果、トップは勿論、上位は全て女生徒が占めたという。

⑨ 校友会の復活と芸術講座

昭和十六年、校友会が報国団に組織替えされて以来、課外活動は極めて制限されたものとなり、体錬の方面に比べて文化方面の活動は殆んど火が消えたも同然となった。昭和二十年九月、文部省は学校報国団を解体して自治的校友会に再編するよう指示し、そのため本校生たちも翌二十一年五月十日、入学式の後で学生大会を開催し、ここに校友会が復活した。そして、戦争中の文化的空白を埋めようとするかのように七月三日から十一日にかけて講堂で校友会主催の芸術講座（公開）を開いた。当日は先ず上野直昭が開会の挨拶



戦後しばしば来校した藤田嗣治
(本校玄関前にて仁田三夫氏撮影)

をし、その後式場隆三郎、梅原龍三郎、藤田嗣治、小宮豊隆、小林秀雄、遠山孝、高見順、今日出海らが講演したと記録にある。この夏には美術研究所も夏期美術講座（七月二十五日～三十一日）を開き、帝室博物館も日本美術史講座（七月八日～十三日）を開いて戦後の美術活動の再生を期したが、本校における芸術講座はそれらに一步先んじて開かれたもので、しかも期間も長く、若者の希望によりバラエティーに富んだ講演者が選ばれた。担当の生徒が講演の依頼に行くと、皆喜んで引き受けてくれ、また、文化的催しの殆んど無かった時代であったから、聴衆も多かったという。

⑩ 高山夏期研究会

昭和二十一年七月二十日から九月二十日までの間、飛騨高山で夏期研究会が開かれた。宿舎には工芸技術講習所宿舍だった林家があられた。高山行きの計画は、はじめは山岳部が発案して参加者を募ったが、学校側がこれを知り、学校の行事として実施することに



配給物資を宿舎へ運ぶ生徒たち (同)



宿舎から写生に出かける生徒たち
(仁田三夫氏撮影、小松光義氏提供)



上高地にて (同)



宿舎における加藤顕清の講話 (同)

なったのだと言われる。その際の推進者は事務官小林義郎と年長生徒田原真一(旧姓村井。石井教室事件を契機に両者は親しくなった)氏であった。引率者として教官西本順、西田正秋、加藤顕清、川合清、寺田春式、脇本楽之軒、小池岩太郎、日下喜一郎、事務官小林義郎らが高山出張を命ぜられ、上野直昭校長も高山に長期滞在した。生徒は男女予科生、本科生約五十名ほどが参加した。左記はその案内状と第一期の計画書(参加者深見実郎氏提供)である。

(高山市美校夏期研究会案内)

一、宿舎 岐阜縣高山市上岡本町美校寄宿舎(高山

驛徒歩一〇分)

一、期間 七月廿日～九月廿日

第一期 七月廿日～八月十日(予科)

第二期 八月十一日～八月三十一日(本科一

般)

第三期 九月一日～九月廿日(本科一般)

一、滞在費用 一期間 二百円(往復旅費ヲ含マズ)

一、旅費 往復旅費 東京～高山間約七〇円

其ノ他ハ適當若干ノ小遣ヲ要スル

一、携帶品 (寢具用ノ枕蓋 敷布 掛布)

(登山希望者、毛布)

自習用具(スケッチブック、絵筆、絵具、ノ

ト等)

一、行事内容

第一期 スケッチ小品展、上高地キャンプ旅行

第二期 絵画講習会及講演会

第三期 展覧会ノ開催

一、附近案内

○上高地及北アルプス(約十里 バスの便あり) ○平湯峠及

同温泉 ○飛彈^(彈)ノ白川郷及五箇山谷 ○小鳥峠 ○下呂温泉

一、監督者 西田・小林・西本先生

一、教官 上野校長・梅原先生・加藤先生・久保先生・吉川先

生他

締切 七月十三日迄 校友会事務室

◎注意 移動申告ハ持参スベシ

以上

第一期 計画詳細

一、七月廿日→八月十日

一、監督者 予科長西田正秋先生

一、参加者 予科生

一、食費 二〇〇円 七月十一日迄(本校会計係ニ納入スベ

シ)

運賃 東京→高山往復五十六円(七〇円)

一、行事予定

1、小鳥峠ハイキング

2、スケッチ小品展

3、平湯峠・上高地キャンプ旅行(二、三泊ノ予定)

4、予科長趣味講座及讀書会等々

一、ハイキング・キャンプ旅行ニハ若干ノ食費以外自動車賃等要

スル

一、携帯品 絵画材料、書籍(各自讀ムモノ)、ノートブック、

冬シャツ、毛布(上高地旅行をするにつき)、其ノ他

一、地方在住者ハ参加ノ可否ヲ至急学校ニ通達スベシ

一、女性ハ帰宅ノ日時ヲ予メ父兄ニ打合せ置ク事

(帰途他へ旅行滞在スル者ハ父兄承認ノ書類ヲ持参ノ事)

(備考)

七月二十日午前五時廿五分ノ大阪行列車デ出発ノ爲四時卅分迄

ニ列車ホームへ集ルコト。モシソレガ不可能ナル者ハ七月十九

日夕七時頃迄ニ準備ヲト、ノヘテ美校内正木記念館ノ二階ニ集

合、西田先生指揮ノ下ニ一泊シ翌朝一揃ニ出発ノ事

以上

費用二百円とあるが、それは当時預金封鎖中であつたにも拘らず、田原氏が鳩山薫子に訴えた結果、大蔵省(当時は四ッ谷第三小学校にあつた)の新鋭官僚鳩山威一郎のはからいにより特別措置がとられ、皆銀行から預金を引き出すことができたという。

第一期の監督教官は西田、加藤の二人で、油画科生徒が多く参加、彼らは毎日美しい自然をスケッチをしたり見学をしたりして過ごした。高山には寺が多く、西田の説明で仏像なども見学した。希

望者は洪草焼きの窯へ行って絵付けをしたり、田中松祐齋（長男田中勇氏も予科生で、この夏期教室に参加した）の春慶塗り工場の見学をしたりした。生徒のなかには田舎へ行けば食料に不自由しないだろうと思つて参加した者もあったが、食料不足は田舎も同じで、米の中にジャガイモか、ジャガイモの中に米か、といった怪しい食事で、すっかり当てがはずれたという。しかし、厳しい食料事情のもとで若者たちの空腹を満たすのは容易なことではなく、宿舎林家の当主房子は市役所に掛け合つたり、伝を辿つて物資を手に入れたりして奔走し、スケッチに行く生徒たちに蓬パンを作つて持たせたり、また、彼女の実家は大阪屋という高山屈指の豪商だったので、七夕祭りには生徒数名をそこへ招待してもてなしたりもした。田中松祐齋の家でも、とつておきの小豆でおはぎを作り、見学に来た生徒に食べさせた。地元の人々はこのように出来るかぎりの歓迎をしたのであった。

前期の七月二十八、二十九日に実施された上高地行きは、参加者たちの脳裏に愉快な思い出として鮮明に刻まれている。先ず前日に先遣隊数名が青年団や飛驒中学から借りたテントを背負つて出発。カッパ橋のほとりの小梨平にテントを張つて一行を待った。本隊は当日朝五時に各自リュックに画材や米、野菜を詰めて宿舎を出発し、濃飛バスで平湯峠を越えて平湯温泉まで行き、そこから歩いて安房峠の難所を越え、中ノ湯を経てお釜トンネルに着いたのが夕方六時頃。谷川の水で米をとぎ、飯盒で炊いてゴマ塩をかけて食べ、また出発したが、トンネルのなかは真の闇で、女生徒たちを中心に、男子が前と後ろについて列を作り、電車ごっこのように紐を引

つ張つて進んだ。星の光を見て、漸くトンネルを出たのが分かつたという。真つ暗のなかを更に歩いて先遣隊の待つところへ到着、夜営となり、テントのなかで女子は抱き合つて眠り、男子は屋根だけのテントから足を突き出して眠つた。翌朝、寒さに震えながら目を覚ますと、上天気で、穂高や焼岳が眼前に迫っている。みな盛んにスケッチしたが、昼過ぎから天候が悪化しそうになつたので、登山を計画していた者も諦めて三時頃全員そこを出発。平湯温泉の宿屋に一泊し、翌朝、高山まで行くトラックがあつたので、みな荷台に乗つて宿舎に戻つた。上高地の外に白川郷へ行く途中の小鳥峠（おどり）へ行つたり、下呂温泉へ行つたりもした。

参加者の正確な数は把握できないが、深見実郎氏が皆から貰つた寄せ書き（八月九日）には次の人々のサインがある。

上野直昭、西田正秋、寺田春弐、加藤喜久子、鳩山信子、安藤由美子、海老原良江、後藤市三、江幡讚、柳沢淑郎、小林、松本光治、大島芳子、藤ヶ崎治子、寺西愛、小林喜巳子、佐藤Y、大野俊夫、中川、田中勇、林房、林隆雄（宿舎林家の一人息子）、兼松雪子（飛驒中学校長の娘。林家に間借りしていて炊事を手伝つた）、TAIBO、（不明一人）

第二期には予定どおり講習会が開かれた。日下喜一郎氏によれば、それは日下氏と小池岩太郎による日本画と図案に関する講演会で、寺と小学校を借りて行われ、地元の人々が大勢聴講したという。

このような夏期研究会の催しも一回限りで、次年度からは開催されなかつた。しかし、高山の宿舎にはその後も暫くは生徒のグルー

プが訪れたという。

① 第一回芸術祭

戦争激化とともに統合、休刊を強いられた美術雑誌は、二十一年、戦後の過酷な物資不足のなかで次々と復刊された。八月には『アトリエ』が、九月には『みづゑ』が復刊され、『三彩』が創刊されている。『美の国』は十二月に復刊されたが、その編集雑誌のなかに主幹の石川宰三郎は次のように書いた。

煙のやうに秋霧の立ちこめた上野の森に、うたごえが打ちひびく。音楽學校、美術學校に若人の溜息が惱みとなり歡びとなつて流れる。あたたかな藝術祭だ。冷たい美術館の輔廊に日見物の靴音が響してゐる。上野の森の祭典と行事に人の心が強くひかれるのはそこに生活の希望の窓を見ようとしてゐるのである。空白な人生に情熱の灯をかゝげてくれるものは藝術であるからである。上野の森が聖なる藝術の森に復して一切の邪惡を追はらねばならない。

芸術祭と銘打った音美両校合同の第一回学園祭は日本国憲法発布祝典の時期に合わせて昭和二十一年十一月七日から十三日まで開催された。本校生にとって、それは戦時下の重圧から開放され、男女共学となつたばかりのときの新鮮な体験であつた。また、学史の上から見ても、ともに芸術を目指しながら異常なまでに交流が杜絶していた両校が初めて合同で行事をするという画期的な出来事であつ

て、そこに活氣と興奮が生まれ、祭りは大きく盛り上がった。両校から選ばれた芸術祭実行委員と指導教官（本校側は生徒課長西本順）の活躍により順調に開幕。両校内および都美術館横の広場で各種の催しものが繰り広げられ、博物館の表慶館でも本校藏品展覧会が開かれた。

この第一回芸術祭については小松光義、深見実郎その他諸氏から出版物や写真、新聞等々の資料が提供されたので内容を把握できる。それらによると、開催に先き立って資金集めのために次の案内状が配布された。

謹啓時下初秋爽やかなる折柄尊台益々御清榮の段奉賀上候

陳者今般東京美術學校並に東京音楽學校學生を主體として新生日本の文化寄與と併せて生徒の志氣昂揚、音楽、美術の普及並に學園結束強化を目的として上野の杜に於て左記に依り藝術祭を舉行し度く存じ候

就てはこの藝術祭をより盛大なる催しと致し度については我が文化藝術に御理解ある貴下の御指導と經濟的御援助を賜はり度乍無
躰右御願ひ旁々御報告申上候 敬白

藝術祭開催次第

- 一、美術展覽會
- 二、演奏會
- 三、演劇
- 四、運動會

十一月月上旬開催の豫定、期日及會場確定次第御案内申上候